

トラウマからの回復過程の物語として読む *Number the Stars*—抑圧された記憶の想起、生き直し、および服喪作業を通して—

Reading *Number the Stars* as a Story of Recovery Processes from Trauma: Reliving the Repressed Past of and Mourning for the Deceased

クマイ恭子 (Kyoko Kumai)

Previous studies of *Number the Stars* have centered on the protagonist, Annemarie: as a story of her bravery; her crossing of the conventional border between adults and children due to the unusual situation of the German occupation and ensuing Danish activities to save Danish-Jews; or her storytelling within the story. This paper sheds lights on the other protagonists as well as Annemarie and explores the reading of the recovery processes from trauma incurred by Annemarie's father and mother, and Peter, the fiancé of her older sister, Lise. Lise and Peter were members of the Danish resistance sabotaging German assets; Lise died from being struck by a German military car when she was seen running away from a raid on a resistance meeting. Her death caused trauma symptoms in Annemarie's parents and Peter evidenced by their inability of "speaking the name, Lise." This paper regards the parents' ignorance of how Lise died as another source of trauma. Another focus of this study is how the traumatic symptoms of Annemarie, the main driving forces in the development of the story, are eased. First, this paper defines the terminologies used in the exploration: trauma, remembering, reliving, mourning. After defining the basic concepts and terms, this paper explores how these processes work in the mother, father, and Peter, with the help of Annemarie's brave acts in helping several Danish-Jews escape the Nazis, including Annemarie's best friend Ellen, serving as the double of the deceased Lise, to lead to the integration of the traumatic past; Ellen triggers the remembrance of Lise in the parents. The process of healing involves how the unspeakable death of Lise has become speakable. The paper also probes how the traumatic symptoms of Annemarie brought by the death of Lise and subsequent silence of her parents are healed. This paper distinguishes trauma from traumatic.

キーワード：トラウマ、生き直し、服喪追悼、ダブル (trauma, reliving, mourning, double)

I. はじめに

Number the Stars (以下 *Number*) はナチスドイツ占領下のデンマークで起きた史実を織り交ぜて書かれた作品である。主人公はコペンハーゲンに在住の Johansen (ヨハンセン) 家の次女 Annemarie (アネマリー) である。アネマリーと並んで重要な役割を占めるのがナチスの弾圧を受けるデンマーク系ユダヤ人でアネマリーの親友 Ellen (エレン) である。本作品は、ユダヤ人強制移住政策に怯えるユダヤ人たちを中立の隣国スウェーデンに亡命させるまでのアネマリーの活躍および彼女とエレンの友情を軸に描かれた物語である。ユダヤ人救出活動においては両親¹および亡き長女 Lise (リーサ) の婚約者であった Peter (ピーター) も重要な役割を

担う。ユダヤ人救出活動はピーターと母が先導するが、後に物語のクライマックスで負傷した母の代わりに船まで包みを届けるといった重要な役割をアネマリーが担い、救出活動を成功へと導く。

以上が主なプロットだが、デンマーク人によるユダヤ人救助活動は実際に行われていたことである。デンマーク出身の前外交官であり歴史家の Bo Lidegaard は 著書 *Countrymen: How Denmark's Jews Escaped the Nazis* の中で、主にデンマーク人漁師による大規模なデンマーク系ユダヤ人の救出行為について詳細に述べている。それによると、ドイツが約 7,000 人のデンマーク系ユダヤ人の強制移住政策を開始した 1943 年、デンマーク独自の民主主義をドイツから守りたいという政府およびクリスチャン王 10 世の意向と合致して、デンマーク国民も自分達の独自性を守ることを望んだ。ドイツによるユダヤ人迫害の圧力が高まった同年、デンマーク人漁師によるユダヤ人亡命作戦が実行されたという。他にも教会にユダヤ人を匿うなどの動きも見られた。作者の Lois Lowry (以下ローリー) はデンマークからアメリカに移住した友人 Annelise からユダヤ人救助活動に従事したデンマーク人の実話を聞き (Lowry, *Afterward* 133)、ナチスへの抵抗運動に従事して射殺された実在の人物 Kim Malthe-Bruun についての記事を読んだことから (Lowry, *Afterward* 136; Lowry, “Number” 98-100) インスピレーションを得、この半歴史的物語を創作した。

メイン・プロットと並行して本作品にはヨハンセン家の長女だったリーサの死によるトラウマからの回復作業が書き込まれている。リーサと婚約者ピーターは結婚を目の前にして、デンマーク人による反ナチス組織、レジスタンスの活動に従事していた。ある日集会をドイツ兵に嗅ぎつけられ、雨の中を逃走の際リーサはナチスの軍用車に轢き殺される。リーサの死の状態がどのようなものだったかは説明がないが、ドイツ兵による反逆者としての処刑は見せしめの側面もあり、無残なものだったに違いない。リーサの死によりアネマリーの父と母、そして婚約者だったピーターは強いトラウマを被る。彼らはリーサの死後 3 年を経ても彼女の名前すら口にすることができないという重度のトラウマを抱えている。当時 7 歳だったアネマリーもリーサの葬儀の頃の記憶が曖昧になるというトラウマ的症状を呈している (トラウマ、トラウマ的等の使い分けについては第 2 節で述べる)。そんな中デンマーク系ユダヤ人である親友エレンその他のユダヤ人救助作業に勤しむことで、父、母、ピーターがレジスタンス戦士リーサの死というトラウマの根源となった過去を生き直し、喪に服する作業を通じてトラウマを自己に統合する様子が作品全体を通じて織り込まれている。また大人たちがトラウマから回復する過程におけるアネマリー自身のトラウマ的症状の寛解も描かれている。

本作品はいわゆる「ホロコースト」ものではなく、物語の主軸は別のところにある。先行研究では主人公かつ語りの視点人物であるアネマリーに主眼を置いた論考がほとんどである。例えば主人公アネマリーとエレンの友情、ひいてはデンマーク人とデンマーク系ユダヤ人の友情の物語、およびアネマリーと彼女に表象されるデンマーク全国民の勇気の物語として捉えた考

察がある (Chaston 107-08, 110)。Jonathan Cathey は戦下におけるアネマリーの勇気が従来の児童文学とは異なり大人向けの戦争物語と同様の表象のされ方をしていると論じる (46, 49)。またアネマリーの勇気の源となる想像力を促す装置として作中に挿入された「赤ずきん」の物語の機能を読み解く論考 (Chaston 110; Walter 126-129) もある。David L. Russell はアネマリーの成長物語および彼女の勇気の物語を中心に据えたホロコーストの周縁文学として本作品を論じ、Don Latham は大人と子供の境界線を曖昧にする、従来の子供は無邪気で守られるものというコンベンションを変えた物語として本作品を読み解く。Latham は境界線の崩壊から更に踏み込んで、アネマリーはエレンと他のユダヤ人の救出活動成功というより高次の目的のためにエレンに作戦の真実を述べず母親と嘘を共謀 (conspire) するという、ロマン派的な子供と大人の関係性からの逸脱について論じる。ロマン派時代の児童文学では子供は無垢で守られ、大人に庇護される者として描かれてきたが、本作品ではアネマリーが大人の役割 (危機を一人で切り抜ける資質を持ち、庇護者としての役割を果たし、大人に変わって妹に物語る) を果たす (Latham 2-8)。論者は Latham の読みに共感する立場をとるが、エレンへの嘘を共有する「共犯」という視点よりも、レジスタンス活動に大人と共に携わるという視点から「同志」を用いたほうが適切だと考える。何れにせよ、これらの論考では、いずれも主人公アネマリーを中心に様々なテーマが論じられている。

だが、*Number* では先述のナチスドイツに轢き殺されたアネマリーの姉リーサの存在も大きい。これまでの論考ではリーサへの言及はあっても、彼女の死の意味およびその影響を中心に据えるものは論者の知る限り見られない。しかしリーサの死によるトラウマのせいで変わってしまった両親の態度・反応はアネマリーの言行に影響を与えているはずである。実際アネマリーはリーサの葬儀当時の記憶が曖昧である。後半のアネマリーの活躍が物語の行方とトラウマを受けた大人たちの回復過程を左右するため、アネマリーへのリーサの死の影響も探求されるべきである。リーサの死後、彼女について話せなくなってしまった両親とピーターのトラウマからの回復の物語という読みをすることで、視点人物アネマリーの役割と彼女自身のトラウマ的症状の寛解も解明できる。父、母、ピーターが呈するリーサについての「語り得なさ」は、エレンを匿う夜まではアネマリーとエレンとの会話、語り、視点人物アネマリーを通してのみ示されている。本論では、リーサのダブルであるエレンその他のユダヤ人救出活動の遂行によって、リーサと生前深い関係にあった人物—母と父およびピーター—が彼女の死から受けたトラウマが、いかに「語り得ないもの」から「語り得るもの」へと移行したかを探求する。

本書のタイトル *Number the Stars* はユダヤ人救出活動の夜ピーターが皆の前で朗読した旧約聖書の詩編 147 章の一節からとられている。エルサレムを再建し、散らされたユダヤの子らを一つにする、あらゆるものの創造主である神は賛美されるべきだという旨の詩である。その一部に “he who numbers the stars one by one . . .” (Lowry, *Number* 86) という言葉が語られる。タイトルの “*Number the stars*” はここから採られた。「主は星に数を定め」という訳である

(聖書新共同訳 494b) が、これを別の角度から見ると、一つの星も失わせないというようにも読める。“he who numbers the stars one by one”はこの詩の第4節にあたる。*The New Interpreter's Bible*では、本節は広い大空の星の数を含むあらゆる創造活動を神への賛美の根拠として述べている箇所だと説明されている(1267)。また、第4節は『イザヤ書』の第40章26節と強いつながりがあり(1267)、当該箇所では「天の万象を想像し数えて引き出された(聖書新共同訳 563b)」という意味で、神の「創造と贖いの活動(“God's creative and redemptive activity” [1267])」が表されていると説明されている。ここで言う「贖い(redemption)」とは *OED* によると「罪と破滅からの解放、特にキリストによる罪の贖い(“Deliverance from sin and damnation, esp. by the atonement of Christ”)」のことである。ヨハンセン家はルター派であり、ユダヤ人だけでなくクリスチャンである人々(特にリーサ、ヨハンセン一家、およびピーター)も救いの対象に含まれると考えられる。つまりこの一節は天に数多ある星は神の被造物であるだけでなく、贖いの対象でもあり、死せる者やその死によるトラウマを受けた者も破滅から解放されるのだと読める。

本論ではトラウマ回復のプロセスを辿る物語としての本作品の読みを試みる。すなわち父、母、ピーターの無意識に抑圧され欠如していたリーサの死という過去が彼らの中で再生され、それと並行して喪の作業が実践され、過去の統合および将来への一歩が希望という形で踏み出されるに至る物語として読む。同時にリーサの死とその後の両親の変化によって影響を受けた主人公アネマリーのトラウマ的症狀寛解の物語としての本作品の読みも試みる。

II. トラウマの定義およびトラウマの自己統御に至るまでの作業

まずトラウマ(外傷あるいは心的外傷)の定義に関して述べる。トラウマの臨床家による様々な見解があるが、共通して見られるのが以下の定義である。主体の中の防衛機能がせき止められないほどの強烈な事件・刺激が外的に起こることにより内面の心的装置に強い衝撃を受けた場合、その事件が内面に抑圧を受け閉じられてしまい、記憶から逸れてしまう。そのことが強い不安や動揺その他の身体的症状として現れることをトラウマという(*Psychoanalytic* 198-199; *The Freud* 572-573; ポンタリス 47-51)。この定義はフロイトの「快感原則の彼岸」と「制止、症状、不安」に依拠している。「快感原則の彼岸」によると、外傷神経症(トラウマおよびトラウマ症候群)を持つ人物は、普段は外傷を起こした原因となる出来事は抑圧されてしまい本人には認識できないが、夢など無意識の出来事の中で強迫的にその場面に再訪する。この反復強迫は「『暗示』に促された願望、・・・忘却されたものと抑圧されたものを呼び出そうとする願望」に支えられているという(153, 169)。「快感原則の彼岸」の英訳版のタイトルは“Beyond the Pleasure Principle”である。すなわち生命は快感の方向にのみ向かうのではなく、「生命のない」状態へも引かれているということであり(162)、反復強迫が全くなくなってしまうと生命も無くなってしまうことになる。フロイトは生の欲動と死への欲動を互いに拮抗

し、人間に均衡をもたらす二つのベクトルとして仮定した (190)。この二つのベクトル (生と死の間の反復強迫) の程度によって症状や状態が決まる。

またフロイトの「制止、症状、不安」では抑圧について詳細に述べられており、「外的刺激を受けると刺激保護が破綻する」(325) と主張されている。この刺激保護の破綻は外界に向けて行われず内面で起こる。つまり自我が外部からの強すぎる刺激を受けると、心的に受け止めきれず内面を抑えつける抑圧が起こると考えられる。この抑圧の影響が身体または行動に現れたものが症状である。例えば父、母、ピーターがリーサという名を口にできず感情を露わにできないことが症状に相当する。自我は症状と固着しようとする性質があるため、症状を取り去るのは容易ではない。トラウマが起きる時、危険に対する自我の反応として不安が生じる。この不安が抑圧を生む。抑圧はトラウマの場合にも強迫神経症における分離と同じような働きをし、「体験は忘れ去ることができないが、その情緒を失い、連想的な関係は制圧されたり中断されたりして、切り離されたように存在するが、思考活動の経過では再生されない」という状態をもたらす (343)。いわば本人による記憶の認識不能という状態が発現するのである。

フロイトに基づいて文学に現れるトラウマを研究した Cathy Caruth (カルース) はトラウマによる抑圧の結果としての症状について次のように述べる。トラウマの体験者は以下のような特徴を持つ。トラウマ患者は、「トラウマとなる事件の記憶を完全に意識することはない。トラウマ患者はその記憶からするりと無傷で抜け出す・・・[トラウマの根源となった体験は]それが起きたことが完全に知覚されないほどに言及不可能なのである(never fully conscious during the accident itself: the person gets away ... [from the memory] apparently unharmed ... [It [the experience that caused his/her trauma] is referential precisely to the extent that it is not fully perceived as it occurs ...)」(17-18)。トラウマの体験者にとって、その原因となる出来事に関しては、自己言及に限界があり、欠如している記憶は「忘れられた」ものとして無意識下に抑圧 (repress) され、意識下ではそれと認識されない欠如になるため、「語り得ない」ものとなる。この抑圧の症状としてフロイトが強迫反復と表現したように、夢や不意のフラッシュ・バックや動揺その他が無意識に現れる場合が多い。この「語り得なさ」の程度が強いほどトラウマは重くなる。

以上の精神分析的定義を基に本論ではトラウマ体験が完全に抑圧され記憶をまったく「語り得ない」状態を「トラウマ」と称し、「語り得る」けれども完全な回復に至っていない状態を「回復期」、トラウマのように抑圧されてはおらず、ある程度「語り得る」ものの、過去の辛い体験のせいでアネマリーのように何らかの症状が現れる状態を「トラウマ的」と捉える。

次にトラウマからの回復についてである。トラウマを持つ者は「彼岸」すなわち死に辿りつかないために、この身体から断絶された (無意識に抑圧された) 記憶を、何らかの形で意識的に再体験し (フロイト、「快感原則」 190)、抑圧されていたトラウマを自らが意識的に取り出したりしまったり出来る記憶に変換する、すなわち自己に統合することが肝要となる (Judith

Lewis Herman (ハーマン) はこれを「自己との和解 (Reconciling of Oneself)」と呼ぶ [202]。フロイトはトラウマ体験の記憶を回収し、生き直すことがトラウマからの回復にとって必要であると以下のように主張した。

The physician cannot as a rule spare his patient this phase of the treatment [recollection of memories]. He must get him to re-experience some portion of his forgotten life, but must see to it, on the other hand, that the patient retains some degree of aloofness, which will enable him, in spite of everything, to recognize that what appears to be reality is in fact only a reflection of a forgotten past. (Freud 19)

また、ハーマンはフロイトらに依拠しつつ独自のプロセスをうちたてた。トラウマからの回復への過程³は心理学者・心理療法者によって異なる形で提唱されるが (Herman 155)、回復へ向かう共通点としてトラウマ体験を物語る作業⁴、すなわちその体験を「想起 (remembering)」することで体験を「再建 (reconstructing)」し、更に「服喪哀悼 (mourning)」する作業が効果的であると述べる (175-177)。単に記憶を回収するだけでなく、トラウマには必然的に喪失が伴うため (“Trauma inevitably brings loss” [188])、失ったものについて喪に服すことが必須なのだとはハーマンは主張する。*Number* で展開されるユダヤ人救出活動はリーサの生前の活動を追体験し、本人が戦士としてなし得なかったことを再現する喪の作業でもある。ユダヤ人 (特にエレン) 救出のための活動はフロイトとハーマンが言う「想起」およびハーマンの「再建」「服喪哀悼」に相当すると考えられる。また、実際の臨床の現場と違って *Number* では戦士リーサの活動を辿ることが回復への道筋となっていることから、本論では「再建」を「生き直し」という言葉で表現する。よって回復の過程を「想起」、「生き直し」、「服喪哀悼 (あるいは喪の作業)」の三種に分けて表現する。ただしこれらは必ずしもこの順序で起こるものとは限らずいくつかが並行して起きることもある。以上の定義に従って、本論ではトラウマとそこからの回復に関する用語を使用する。

III. それぞれのトラウマ

Number において、トラウマを持つ者として書き込まれているのは、主人公アネマリーの両親とピーターであり、トラウマ的症状を呈しているのがアネマリーである。この4人に共通するのは、各々の症状の原因はリーサの死ということである。物語の舞台は第二次世界大戦中、ナチに占領されて3年目のデンマークである。コペンハーゲンに住むヨハンセン家の長女リーサ (生きていれば21歳) は、ナチスドイツへの抵抗組織レジスタンスの戦士であった。当時18歳で結婚を二週間後に控えていたリーサがナチのトラックによって無残にも轢き殺された後になって、両親はリーサの戦士としての活動を初めて知る。リーサの夭逝後、両親は彼女のことを一切口にしなくなった (Lowry, *Number* 17)。リーサのウェディングドレスや衣類を青いトランクに収め、その後一切それを開けようとしなかった (17, 41)。母はアネマリーが

リーサを彷彿とさせることを言っても静かに笑うだけでほぼ無反応である (17)。この反応は重いトラウマにより記憶が抑圧されていることに起因すると考えられる。本作品でリーサの記憶の訪れにより母が苦痛を覚えると明言されているのはこの暗示的な一箇所のみだが、この一節によって以前にもリーサを彷彿とさせる発言に対し、母親が何らかのトラウマによる身体的反応を示したことが窺われる。父とピーターに関してトラウマの症状と見られる記述がある。二人ともリーサの死後変わってしまい、3年経った後も父はとても年とって疲れ、敗北感に打ちひしがれているかのように見えた (17)。ピーターも解放を求めるドイツ不認可の新聞 *De Frie Danske* (7) —*The Free Danes*— (『自由デンマーク人』) を届けにヨハンセン家に来るが、リーサ存命のようにアネマリーや妹の Kirsti (キアスティ) を笑わせることもなく、常にせかせかしているようになった (17)。ピーターも一切リーサの名を口にしない。リーサの死はリーサをして、その名前をも「語り得ない」存在に転じさせしめてしまった。両親とピーターに見られるリーサの「語り得なさ」は、それを伝える文学的手法の中にも見られる。彼らの心象や感情は、回復の端緒となるエレンを匿う夜まではすべて視点人物アネマリーを通してか、全知の語りによってのみ語られている。

アネマリーも両親のこの変化—両親がリーサについて「一切口にしない」こと—を認識しており、リーサの思い出を喚起しないよう気をつけている (17)。よって、うっかり妹のキアスティが両親の部屋で両親と川の字になって寝ていた時のことについて言及した時、母のことを心配する (“she hesitated and glanced at her mother, *fearful* that she had said the wrong thing, the thing that would bring the *pained* look to her mother's face” [19; 強調論者])。当時はリーサも存命中でアネマリーとベッドを共にしていたため、リーサに間接的に言及してしまったことになる。この時点で10歳のアネマリーは母親の顔に苦しみがよぎるのではないかと不安に思う。このようにアネマリーは子供らしい自由さや無邪気さで意見や問いを発することができない。リーサの死によるトラウマが引き起こした両親の変化はアネマリーに大きな影響を与えていることが分かる。

他にもアネマリーのトラウマ的症状が読み取れる場面がある。ユダヤ暦の正月にナチスドイツによるデンマーク系ユダヤ人の排斥が始まった時、ヨハンセン一家はエレンを、ピーターはローセン夫妻を匿う。ここで作者はエレンにリーサの死の理由をアネマリーに対して尋ねさせている。アネマリーは「よく知らないのだ」と答える (40)。この記憶の空白はアネマリーのトラウマ的症状を示唆している。また葬儀のこともアネマリーはあまり覚えていない (130)。この記憶の部分的欠如にトラウマ的症状が見てとれる。

両親はリーサの訃報を受けた時、彼女の死の詳細をアネマリーに語らなかったが、理由は理由を明かさなかったのではなく、明かせなかったのである。それはアネマリーが最終章で真実を知ることによって「耐えられるかわからない (“wasn't certain that she could bear the knowledge” [130])」と評したように、語るに「耐えがたい」ものだったからだ。リーサの死によって父が

受けた衝撃は、彼が拳でもう一方の掌に殴りつける音としてアネマリーの台詞の中で再現される(“He made one hand into a fist, and he kept pounding it into the other hand. I remember the noise of it: *slam, slam, slam*” [41; 強調論者])。リーサの死後3年間、両親はリーサの所持品が入った一つつまり抑圧された記憶を刺激する一トランクを決して見ないのだとアネマリーはエレンに語る(42)。

先述の通り、トラウマはその根源となる出来事を認識できないように無意識の中に記憶を抑圧してしまうことで起こる。父、母、ピーターはナチスによるリーサの死のショックから記憶を押さえ込み、その名を口にできなくなったのだ。彼らは、トラウマの根源となるリーサの死への認識が欠如しているが故に、無意識のうちに無反応である。彼らは占領下の日常生活を淡々とこなしているかのようであるが、トラウマの重度はむしろ高い。トラウマによる忘却は、アネマリーがリーサを彷彿とさせることに言及した時に彼女が危惧した痛みを母が全く見せなかった点にも見いだせる。また、無意識に自分の言動に対する母の反応を窺ったり、「語らない」両親を観察してしまうアネマリーの姿にはリーサの死によるトラウマ的症状が見て取れる。リーサの死以降の3年間に及ぶ大人たちの沈黙とアネマリーのトラウマ的症状はエレンをリーサとして匿う時に変容する。

IV. 回復へ—生き直しと服喪哀悼

両親、ピーター、アネマリーのトラウマおよびトラウマ的症状は、リーサのダブル、エレンの誕生とエレンを初めとするユダヤ人救済活動によって回復へと向かうことになる。ナチスの強制移住政策によってエレンがヨハンセン家に身を寄せた時、父はリーサの名を口にこそしないものの「かつては3人の娘がいた。今夜再び3人娘を持てることを誇らしく思うよ」とエレンに言う(38)。この時点からエレンはリーサのダブルとして機能するようになる。このことは、リーサの活動を知らず彼女を守れなかった両親にとってトラウマからの回復作業の端緒となった。また後述するように、排斥されるユダヤ人の救助はピーターとアネマリーにとっても症状緩和の機会となる。

エレンがリーサのダブルとして描かれていることは、ドイツ将校らによるヨハンセン家捜査時に決定的になり、それがきっかけとなって両親はリーサを想起する。エレンが身を寄せた翌朝まだ暗い4時ごろ、ドイツ将校がヨハンセン家を捜索した時、名前を尋ねられたエレンは自ら「リーサ」だと宣言する(47)。3人の少女のうちエレンだけが黒髪である。そのため彼女が本当はローセン家の娘であり、ヨハンセン家の娘のなりすましではないかと疑う将校が髪の色に言及し、エレンの髪を乱暴に掴んだ時、父は「娘を放せ(47; 強調論者)」と明言する。更に機転を利かせてエレンと同じ髪の色をしていた赤子時代のリーサの写真(そこには“Lise Margrete”と書かれていた[48])を将校に見せる。この時父はリーサという名を声に出して語らなかったとしても、リーサの写真をエレンとみなす行為によってリーサという名を自己言及

したのである。これは父の想起の第一歩と言える。将校はリーサの写真を二つに引き裂き、床に落として無言で立ち去る。この行為は象徴的である。リーサがドイツ兵に命を引き裂かれた時の再現と、そのダブルとしてのエレン確定の二つがこの瞬間に起こったのだ。

続いて両親はリーサの名に言及し、本格的に想起の作業に入る。ドイツ将校らが去った後、髪の色について自責するエレンを母は慰め、励まして、リーサについて自らの口から語る

（“And weren't we lucky that Lise had dark hair when she was a baby? It turned blond later on, when she was two or so” [50]）。父も同調してリーサの赤子時代に言及する（50）。両親はこの時ようやく3年間の沈黙を破り、リーサの名を口にした。視点人物アネマリーが語りの声を借りてそれを補強する（“Mama and Papa had spoken of Lise. The first time in three years” [50]）。この「想起」と「語り」によって両親は回復へと歩みを進めたのである。両親は、長きにわたり「語り得なかった」リーサの名を期せずして語る機会が与えられたのだ。それはリーサのダブルとしてエレンが機能し始めたことと無関係ではない。

アネマリーにとってもエレンは姉リーサのダブルとなる。ドイツ将校に呼ばれる直前、アネマリーはエレンが常に身につけていた「ダビデの星」のネックレスを外すのを手伝う。手がもつれてうまく外せないエレンの首からアネマリーが鎖を引きちぎり、自らの掌の中に握って隠した。ドイツ将校の尋問中ずっと握りっぱなしだったため、ネックレスのチャームであるダビデの星の形がアネマリーの掌にくっきりと刻まれた。またタイトルでも言及される“Stars”にはこのダビデの星も含まれていると考えられる。エレンのダビデの星は、ユダヤ人全員（Stars）を代表し、エレンのようなユダヤ人を支えるヨハンセン家をはじめとする全デンマーク人をも表す小道具として使われているのである。エレンの象徴であるこの星がアネマリーの掌中でアネマリーと溶け合った。そのため身体的にもエレンはアネマリーの掌に書き込まれ、血を分けたような存在、疑似姉妹的存在となったと言える。そして先述のように、エレン本人の宣言と父の言葉によってリーサのダブルであることが確定した。エレンはアネマリーにとっても姉リーサのダブルとなったのである。また、このネックレスはアネマリーが隠したのだが、隠し場所は先述の青いトランク内にあるリーサの黄色いドレスのポケットの中であった（131）。エレンのネックレスがリーサの思い出と同じ場所に収納されることになったことも、エレンのダブル化による疑似姉妹関係誕生を象徴している。

エレンがリーサのダブルとなったことで、回復の作業は生き直しと服喪哀悼に進む。両親はかねてからピーターと連絡を取り合っており（先述のようにレジスタンスの新聞を届けに来るのはピーターである）、漁業を営むギレライエ在住の Uncle Henrik（ヘンリック伯父）の許にエレンを連れて行くことを決める。ヘンリックが漁をする海の対岸は「ナチ側が・・・中立であることを望んでいる（126）」スウェーデンである。そこへ亡命できれば安心である。ヘンリックとピーターは共にデンマーク系ユダヤ人の友を亡命させていた。エレンも亡命させて救うのがギレライエ行きの目的である。父は通常通り出勤しないとドイツ兵に疑問の目で見られる

危険性があるために同行できない。母と3人の少女のみがギレライエのヘンリックの許へ向かうことが決定する。父はそこで何が行われるかを周知しているが、コペンハーゲンの家に残って朗報を待つ(97)。

この日アネマリーはトラウマ的体験の生き直しと喪の作業を図らずも父(身体的には離れているが)、母、ピーターと共同で行うことになる。というのは、ギレライエでの夜、ヘンリックの家に“Great-aunt Birte (ビアテ大伯母さん)”の哀悼という名目でエレンの両親を含むユダヤ人が集まるが、この集会は比喩的なリーサへの哀悼になるためである。「ビアテ大伯母さん」は実在しない親類でアネマリーは不審に思うがエレンにそれを告げない。Latham が解釈するように⁵、アネマリーは母と秘密を共有することに決める(7)。母とアネマリーは同等の存在(“they became equals” [Lowry, *Number 79*])となった。アネマリーはこの瞬間、母の同志となったのである。ピーターと母がそれぞれにユダヤ人グループを先導することになり、救出活動が開始された。リーサのダブルであるエレンだけでなくユダヤ人という友たちは、守られ生き延びさせなければならない。彼らを守ることで次なる喪の作業となる。その思いは父、母、ピーターに共有されていた。エレンおよびローセン夫妻の救出はリーサの生き方を辿りトラウマの記憶を生き直すことに繋がる。

また「ビアテ大伯母さん」は、比喩的なリーサ本人であるとも読める。というのも「ビアテ大伯母さん」はその日そこに集ったユダヤ人たちを救済するための擬人法だからだ。棺の中には、ユダヤ人たちが海を渡るための防寒用の衣類や毛布が詰められていた。皆が集まった時、集会を知ったドイツ兵が踏み込み、あわや棺が開けられそうになる。母の機転で棺は開けられることなく終わり、ドイツ兵は去る。「ビアテ大伯母さん」の正体はドイツ兵に決して「語ってはいけないもの」だった。この「語り得なさ」は父、母、ピーターにとっては故リーサの記憶と重なる。そのリーサの象徴である「ビアテ大伯母さん」は、この夜リーサが生前親密だった家族や婚約者と共にいる。レジスタンス戦士リーサの活動対象でもあったユダヤ人も集い、リーサ生前の世界が再現されたのである。

服喪哀悼の作業とリーサの死の贖いは哀悼の歌の朗読という形で更に強められる。ドイツ兵の踏み込み調査後、出発を目前にしてピーターは皆を落ち着けるかのように旧約聖書から無作為に以下の詩編147章の一節を選び、朗読する。

O praise the Lord.

How good it is to sing psalms to our God!

How pleasant to praise him!

The Lord is rebuilding Jerusalem;

he gathers in the scattered sons of Israel.

It is he who healed the broken in spirit

and binds up their wounds,

he who numbers the stars one by one . . . (86-87)

神は散らされたイスラエルの子らを集め、イスラエルを再建し、傷ついた心を癒すというこの詩は、亡命を目前にしたユダヤ人たちだけでなく、リーサに向けても語られた哀悼と癒しの言葉と言える。これによって服喪哀悼の儀式は遂行されたと言えよう。

この喪の作業は母とピーターの変化を誘発する。朗読するピーターの声は力強くしっかり(87)しており、彼は朗読後出発を告げる際に母を「インゲ」と名前と呼ぶ(92)。リーサとの婚約時代からの変容である。婚約時代ピーターは母を「ヨハンセンさん」あるいは婚約の嬉しさと興奮から冗談めかして「ママ」と呼んでいた(92)。しかしいつの頃からか、母(および父)とピーターは同志という関係になっていた。それが声で明示されたのが当該箇所である。ピーターはリーサの死後とはうって変わって、「青年期から抜け出て、大人の世界に居場所を得たかのようにだった」(92)。この変容はピーターによるトラウマからの回復作業実践の成果を示唆している。この時点ではリーサの名をこそ口にしないものの、正体を「語り得ない」ビアテ大伯母さんの前で詩編を口ずさむことにより、ピーターは本当の意味でのリーサの葬儀を司式し、リーサとの婚約時代の自分から一歩踏み出したのである。ピーターと母はユダヤ人たちを先導して森の中を抜け海岸へ送り届ける。

物語のクライマックスでアネマリーはエレンを初めとするユダヤ人救出と、大人たちの生き直しおよび服喪哀悼の成否を左右する役割を担う。これがアネマリーにとってのトラウマ的症狀寛解へとつながる儀式ともなる。翌朝4時半頃、母が戻ってきたが彼女は足を傷めていた。母を支えて家に入る途中でアネマリーは小さな包みが落ちているのを発見する。これは救済活動の成否を握る大切な小道具だった。歩けない母の代わりにアネマリーがこの包みを渡すという危険な仕事を遂行する。この包みは、ドイツ兵がユダヤ人を探し当てるために使い始めた、犬の嗅覚を麻痺させるためにコカインを混ぜたうさぎの血を染み込ませたハンカチである

(Lowry, *Afterward* 136)。これなしでは、たとえ死んだ魚で床が埋まっている船上でもたちまち犬は船底の人の匂いを嗅ぎつけてしまう。ユダヤ人救出はナチス妨害活動という意味ではリーサの遺産である。ユダヤ人の安全だけでなく両親とピーターの生き直しと服喪哀悼の成否がアネマリーにかかっている。トラウマ的症狀を呈していたアネマリーにとってもこの冒険は生前のリーサの生き様を辿る作業になる。幾層にも重なる意味でアネマリーの成功は必須である。早朝の森の中、アネマリーは走る。途中でドイツ兵に止められるが包みは没収されずに兵士から解放される。アネマリーは無事ヘンリックに包みを渡し、ドイツ兵の船上の取り調べをかわすことが可能となった。アネマリーの成功によって両親らの生き直しと喪の作業は完遂され、アネマリー自身も姉がしたであろう生き方を再現したのだ。エレンたちも無事スウェーデンに到着した。救助活動における生き直しと服喪哀悼に続くプロセスは作品の最終章で明示される。

V. ト라우マの記憶と自己との和解、アネマリーのトラウマ的症状の寛解

2年後に戦争が終わった時、両親はリーサの名だけでなくトラウマとなった過去を語れるようになっていた。ピーターはナチスに捕らえられ、公衆の面前で処刑され、墓に埋葬されることもなかった。ピーターの眠る場所に訪れた日の夜、両親は自身の口で、アネマリーにリーサの死の真相を全て語る。今やリーサの死は両親自らが「語り得る」ものとなった。リーサの死後3年に及ぶ沈黙は、リーサがあまりにも若くして逝ってしまったことと(131)、父と母がリーサの生前の活動について無知だったことが重みを加え、カールスのいう記憶が自己言及不能な状態になって起きたのだろう。トラウマには否応なく記憶の欠如がつきまとう。本人が認識できない重いトラウマは、エレンによるリーサのダブル化が契機となった回復作業が始まるまでは、両親の沈黙については他の人物や語りに説明が任されていた。それが今、両親自ら「語り得る」ものとなったのだ。真相を語った後、母は「長く深く息を吸った」(131)。これはトラウマの過去を吸い込み一体化する行為である。両親は過去の自己統御へと至ったのである。終戦後ようやくリーサの死因に言及できた時、両親の自己は過去と統合され、ピーターが朗読した聖書の一節 (“*It is he who healed the broken in spirit and binds up their wounds . . .*” [86-87]) にある通り癒された。

両親がリーサのことを3年ぶりに口にした後、トラウマ回復の道程は比較的短かったと言える。難局はいくつかあったが、主人公アネマリーの働きによって父と母の生き直しの作業も完遂され、最後にはリーサの死の真実を語れるようになった。ハーマンが言うように「語るうちのうちに、外傷ストーリーは証言」となり、同時に回復のための「癒しの儀式 (a ritual of healing)」となったのだ(181)。

ピーターに関しては終戦を前にして公共の場でドイツ軍に見せしめとして銃殺されてしまうものの、第4節で考察したようにデンマーク系ユダヤ人救済に従事するうちに、自ずとトラウマを生き直し、服喪していたのである。処刑の前にピーターはリーサの横に埋めて欲しいと、ヨハンセン家に宛てた手紙の中でリーサの名に初めて言及する。そのことは語りの中で以下のように知らされる。“*It [His letter] had said simply that he loved them, that he was not afraid, and that he was proud to have done what he could for his country and for the sake of all free people. He had asked, in the letter, to be buried beside Lise*” (Lowry, *Number 129*)。本引用箇所から、ピーターがリーサを想起していたことが読み取れる。また、リーサの生前から二人で従事していたレジスタンス活動を全うし、拿捕され処刑が確定してもなお誇りを持てるほどにトラウマの傷は自己と和解されていたことが窺える。

最後にトラウマ的症状を抱えたアネマリーだが、最終章でもリーサ葬儀の際の記憶は曖昧なものに止まっている。しかし、両親の口からリーサが亡くなった真の理由を聞いた後にアネマリーはピーターとの婚約当時、黄色いドレスを着て楽しげに踊っていたリーサを想起する(130-31)。リーサを想起できる状態はアネマリーのトラウマ的症状の寛解でもある。アネマ

リーはこの後青いトランクを開ける。抑圧されていたリーサの過去は解放された。折りたたまれた黄色いドレスのポケットに隠されたエレンのネックレスは「黄金色に輝いていた」

(131)。この輝きは、リーサのダブル、エレンがスウェーデンのどこかで無事であることを示唆する。また、リーサの死後「語れなかった」両親の「語る者」への変容の徴でもある。

VI. おわりに

本論ではリーサの死による両親および婚約者ピーターのトラウマと、トラウマからの回復のため彼らがリーサを想起し、リーサの生前の活動の生き直しと服喪哀悼の両方を遂行し、過去を自己に統御する様を探求してきた。最後の場面でアネマリーは父に自分がちぎったエレンのネックレスの鎖を直してくれるように頼む。そして今後は約束どおり (96) エレンに再会するまでそれを自分が身につけるといふ。リーサのダブルであるエレンが肌身離さずつけていたネックレスをアネマリーが身につけることで、ふたりは本当の姉妹のように共にいる存在になっただけでなく、両親も亡くなったリーサと象徴的な形で共にいることができるようになった。記憶の抑圧から変わってしまった父、母、ピーターはエレンを初めとするユダヤ人の救出を通じてトラウマの記憶を想起し、生き直しと服喪哀悼を遂行し、過去の自己統御へと至った。リーサの死による影響を受けたアネマリーも両親の変容によってリーサを想起し、トラウマ的症状が寛解した。確かにピーターの死はトラウマの克服が即幸福を約束するものではないことを暗示している。それでもこれまで論じてきたように「語り得ないもの」が「語り得るもの」に変容したことによって、本作品はローリーの企図を越えてトラウマからの癒しの物語ともなったのである。

尾注

1. 本作品の原作では、両親には「Papa」、「Mama」という呼称が人物の会話および語りの中で用いられているが、本論では「父」「母」「両親」という呼称に統一する。
2. レジスタンスは *Number* およびニューベリー賞授賞式のスピーチ (Lowry, "Number" 100) では固有名詞のグループ名として使用されているが、Lidegaard は小文字で「レジスタンス活動」という文脈で使っている。本論では作品に従ってレジスタンスという名の組織としてこの言葉を用いる。また実際に活動に従事した Joergen Kieler は、抵抗組織の地下活動は若者で成り立っており、中には 17 歳以下の者もいたという。彼らは線路破壊などのドイツ妨害活動を行なった。ドイツ軍は抵抗組織のメンバーには極刑を導入した (144-145)。
3. トラウマの定義と治療法には諸説あるが、本論では回復のプロセスに関してはフロイトおよびハーマンを援用する。
4. 回復の第一段階は安全な環境の確保 (Herman 153) であるが、ハーマンの理論は臨床の場を想定しているため、本作品の設定環境とは異なる。*Number* における舞台設定は戦時下の被

占領国である。また本作品で考察するトラウマの回復は臨床医師の手に委ねるものでもない。したがって第一段階の説明は割愛する。

5. 「ビアテ大伯母さん」 哀悼の集会で開会を告げる母と目が合った時にこの嘘について何も言わないという共謀が母親と娘の間で達成され、母娘間の境界が外されて二人は共犯者になったと Latham は読む (7)。Latham の言うように二人は同じ目的を持つことを確信したことに相違ないが、「はじめに」で述べたように本稿ではアネマリーと母は嘘の共有者ではなく、レジスタンス活動の「同志」になったという立場をとる。

Works Cited

- Caruth, Cathy. *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative, and History*. Johns Hopkins UP, 1996.
- Chaston, Joel D. *Lois Lowry*. Ed. Ruth K. MacDonald. Twayne Publishers, 1997.
- Freud, Sigmund. *Sigmund Freud XVIII: Beyond the Pleasure Principle, Group Psychology and Other Works*. Translated by James Strachey. Vintage, 2001.
- Herman, Judith L. *Trauma and Recovery: from Domestic Abuse to Political Terror*. Basic Books, 1992.
- Kieler, Joergen. "Personal Narratives: Kieler Jorgen." *The Rescue of the Danish Jew: Moral Courage under Stress*. Ed. Leo Goldbarger. NYU P., 1988. pp. 140-153.
- Latham, Don. "Childhood under Siege: Lois Lowry's *Number the Stars* and the *Giver*." *The Lion and the Unicorn*, vol. 26-1, Jan. 2002, pp. 1-15. *ProQuest*, search.proquest.com/docview/743816374?accountid=12653.
- Lathey, Jonathan. "Reading War Novels: Seeking a New Heroic Code." *Children & Libraries*, vol. 8-2, 2010, pp. 44-50. *ProQuest*, search.proquest.com/docview/745590327?accountid=12653.
- Lidegaard, Bo. *Countrymen: How Denmark's Jews Escaped the Nazis*. Knopf, 2013.
- Lowry, Lois. *Afterward. Number the Stars*. Houghton Mifflin Harcourt, 1989, pp. 133-137.
- . *Number the Stars*. Houghton Mifflin Harcourt, 1989.
- . "Number the Stars: Lois Lowry's Journey to the Newbery Award." *Reading Teacher*, vol. 44-2, Oct. 1990, pp. 98-101. *EBSCOhost*, search. ebsohost.com/login.aspx?direct=true&db=aph&AN=11080512&lang=ja&site=ehost-live.
- Psychoanalytic Terms and Concepts*. Eds. Burness E. Moore and Bernard D. Fine. American Psychoanalytic Association, 1990.
- "redemption 2a." *Oxford English Dictionary*.
<https://www.oed.com/view/Entry/160259?redirectedFrom=redemption#eid>
- The Freud Encyclopedia: Theory, Therapy, and Culture*. Eds. Edward Erwin & et al. Routledge, 2002.
- The New Interpreter's Bible. Vol. 4*. Eds. Michael E. Lawrence and et al. Abingdon P., 2002.
- Walter, Virginia A. "Metaphor and Mantra: the Function of Stories in *Number the Stars*." *Children's*

Literature in Education, vol. 27-2, June 1996, pp. 123-130. *EBSCOhost*, 10.1007/BF02355693.

『聖書一新共同訳』．共同訳聖書実行委員会 [編]. 日本聖書協会, 2001 年.

フロイト, ジークムント. 「快感原則の彼岸」. 『フロイト著作集 6』. 井村恒郎、小比木啓吾 [訳]. 人文書院, 1969 年. pp. 150-194.

フロイト, ジークムント. 「制止、症状、不安」. 『フロイト著作集 6』. 井村恒郎、小比木啓吾 [訳]. 人文書院, 1969 年. pp. 320-376.

ラプランス, J.・ポントリス, J. -B. 『精神分析用語辞典』. 村上仁 [訳]. みすず書房, 1977 年.